

成人前に何度目かの恋に溺れた。

恋をすると溺れるような気持ちになるというのが本当のことなら、たぶんこれが初恋だったと、珠紀は思う。

誕生日を夢みたいなホテルで過ごしたことや、無人のオフィスでタブーを意識しながら抱き合ったこと、珠紀が大切にしていた想い出の全部を、夢のような恋人はテレビのスイッチを切るより簡単にすべてを終わらせた。

それというのも、彼も珠紀も男だったからで、こればかりはどんな努力をしても、どうにも変えようがなかった。

あるいは、科学の力で強引になんとかすることもできたかもしれないが、それが恋人の望みだったとは思えない。珠紀にとつて男の恋人は彼が初めてだったが、恋人にとつては珠紀が男であることこそ、恋愛の重要なポイントに違いなかったからである。

彼は金髪碧眼のヨーロッパ系アメリカ人で、十近くも年上のエグゼクティブだった。下町で生まれ育った珠紀とはなにもがが違いすぎて、最初は共通項がないことがすれ違いの原因にもなった。

だが彼が歩み寄ってくれたとき、珠紀は無自覚のひがみ根性から抜け出せて、傲慢で知られる彼に従うことも、男としての機能を無視したセックスも、なにもかも受け入れられたのである。

地下ホームへと続く長いエスカレーターで運ばれながら、珠紀は涙を拭って後悔に気を病んだ。

英語のつたない珠紀のレベルに話を合わせてくれていたようで、実際は話半分も聞いていなかったのではないだろうか。退屈でつまらないという本意を、彼なりの気遣いですつと隠していたのかもしれない。

男性とは未経験だった珠紀に、技巧を一から教授しながら、彼は辟易したのではないだろうか。いつまでも慣れない、口脛性交さえ受け入れられず羞恥を捨てられなかった

若くて愚かな珠紀には、この苦しみを癒す手段はなにひとつ思いつかなかった。

ひとけのなくなった成田空港は白々しい光に満ちている。最後の成田エクスプレスが発車する前に帰らないと家族が心配するだろう。なにしろ一度きりの無断外泊で、殴り合って喧嘩した兄がうるさい。

こんなときばかりは、家族の顔を思い浮かべただけで鬱陶しさが込み上げる。だれもいないところで一人ぼっち、シクシク泣きたいと、珠紀は失恋の歌によくあるような、陳腐で非現実的な願望を抱いた。

泣いて想い出に酔えるナルシストにはなれないし、なによりそんな自分が自分で許せないくせに……。

「……………」

無意識にため息をついた珠紀は、グラグラ揺れる頭を自分で支えながら歩き出した。

苛立ちよりも恋しさが募る。どうして駄目だったのか、そればかりが脳裏をよぎる。

自分のことを……。

アメリカに帰れば言葉の壁などなくなる。センスのいい会話を違和感なくこなし、すばらしい官能を分かち合える相手は、美貌と地位と才能と、すべてに秀でた彼には選び放題だろう。

認めるのは困難だったが、珠紀は自分が捨てられたことを受け入れるしかなかった。

地上と違い、地下のホームは都心への帰り客でざわめいている。

大きなスーツケースを手にした満足げな女性、アルミのアタッシュケースを片手にモバイルをのぞき込んでいる男性、様々な人たちがそれぞれの世界に埋没していた。

目の下に隈をつくり、赤い目をした自分だけが、この世の不幸を背負っているようだ。

クリーム色の電車がホームに滑り込み、人々が乗り込む。ジャケットのポケットに小さな財布を一つ突っ込んだだけの珠紀は手ぶらで乗り込み、空いている席にすわった。

通路側に半分乗り出したような格好でひじ掛けに頰杖をつくと、車両の境のドア上、黒地に赤く流れていく液晶文字が不意に目に入った。

「どんなニュースも、今日自分に起こった悲劇に比べれば他人事ではない。」

——そう思っていた。

高速道路の上り車線の玉突き事故で死亡した犠牲者の中に、両親の名前があるのを読み取るまでは——。

◇◇◇ 1 こういう風に生きていく ◇◇◇

東京都某区実乃里町。

国道と私鉄線路に挟まれた旧街道沿いの商店街が元気な町の一丁目、〈サクラ食堂〉は、美形の兄弟と気風のいいおばあちゃんが名物の、アーケード内の定食屋さんである。

味の方もなかなかだけど、この際それは置いておこう。

その日のお昼、このサクラ食堂が満員だったのは、隠れた名店を知って日本中からお客さんが押し寄せたおかげではなく、テレビ局がやってきたせいだった。

「リツちゃん、リツちゃん、アンタどう見てもその化粧は濃すぎるって」

「そうかい？ くりすちゃんでおーるの試供品、こないだいっぱいもらったからさ」

「クリスちゃんだか教会だか知らないけどさ」

「リツばあちゃん、クリスチャンデイオールでしょう。マ

ツばあちゃん、それはブランド名」

効きすぎなくらい暖房の効いた狭苦しい年末の店内で馬鹿馬鹿しくもツッコんだのは、サクラ食堂の次男坊、脱色して染めた栗色の髪がサラサラの二十一歳、桜田珠紀である。

猫目に色白、ほっそりと華奢な印象だが、これで身長は一八〇近い。洗いざらしのシャツに色落ちしたジーンズが、泣かせるほど普通っぽかった。

珠紀の前には濃すぎる化粧を指摘された祖母のリツが、その傍らにはリツの親友のマツが、清潔なテーブルの上に並べた茶系の緑茶を挟んで立っている。

「辰吉さん、本当に恋人いらつしやらないんですか？」

「は、はあ」

「私のことからかかってるのじゃなくて？」

「えっ？ とんでもないです。からかうなんて、そんなことないです」

「じゃあ私、食堂の若女将に立候補しちやおうかなあ」

「そつ、それは困りますつ」

「まあ、赤くなって、ステキ、辰吉さん」

カウンターの中にいて、リツより更に濃い化粧を施したボア付きロングブーツの女性リポーターにからかわれているのは、生真面目一直線、同時に独身道まつしぐらの長男、二十三歳の辰吉だった。

短く刈った漆黒の短髪に切れ長の黒瞳。しなやかな四肢を白い調理着でいなせに包み、ピリツとした雰囲気を漂わせている彼が、軟派な外見の珠紀と兄弟とは、一見すると認めがたい。しかし吊り気味の眦と尖った顎、少々肉厚の色つばい唇という部位は瓜二つだった。

リポーターの女性は、いま奥様の間で人気の昼帯番組〈Goood!〉情報コーナーの司会者、安田緑である。

「うわあ、すごいたくさんのお」

開けつ放しの引き戸にかかった暖簾をくぐり、可愛らしい声音で言いながら入店した制服にコート姿の少女は、たちまち向けられた四方からの注目にペコリと頭を下げた。

ニッコリと謝罪した。見ればひげ面男を囲み、老いも若きも店内の男が大勢集まつてきている。

「ひよこちゃん、学校は終わったのかなあ？」

「ううん。早退しちゃった」

若い男に問われたひよこは、うながされてひげ面男から離れ、店の奥へと進んだ。

「辰兄ちゃんには内緒にしてね」

「ウンウン」

ペコリと可愛く舌を出して見せる愛らしい仕草に、男は脂下がつて頷く。

ひよこを守ってひげ面男を囲んだ男たちは〈ひよこ警備隊〉、通称〈ひよ警〉と呼ばれる実乃里町商店会の連中だった。

「期末テストはもう少し先だろう、平日にしちゃ早すぎる

帰還じゃねーの？ ひよこ」

テレビクルーの間を抜け、〈ひよ警〉の男たちに守られててこつそりと店内奥の死角に陣取ろうとしたひよこの背に、珠紀の軽い声がかかる。

「ごんにちは、長女で末っ子のひよこです」

「ああつ、いい……っ！」

自己紹介した少女、ひよこに向かって妙な声を出したひげ面男は、駆け寄ってくねくねと身悶える。

「いまの、もう一回やってくれる？ 今度はちゃんと撮るから、ネッ？ ネッ？」

「ええっ？ いまのつて？ なんにもしてないですけども」

三つ編みにした黒髪を頭の両サイドでくくって垂らしたひよこは、兄たちに酷似した美少女で、チェックの制服のミニスカートからは、十二月の寒さに負けない細くてまっすぐの魅力的な足がのぞいていた。

「アイテツ」

紺のハイソックスに包まれたひよこの足に視線が釘付けのひげ面男の背中に、ドスンと衝撃が走る。

「ああ、すみません、そんなところにいるとは思わなくて」振り返ったひげ面男に向かって、見下ろした若い男が

「ただいま、珠兄ちゃん」

つくろつた笑顔で振り向いたひよこは、声を潜めて挨拶した。

「内緒にしといてくれるよね？」

「さあ、自分で聞いてみちやどうだ？」

顎を引いて示した珠紀にうながされ、そうつとカウンターの方に視線をやったひよこは、ただでさえ吊つた眦を尖らせてこちらを睨む、親代わりの長兄、辰吉と、パツチリ目を合わせてしまう。

「あう」

悲しい声を漏らしたひよこは、しょんぼりと辰吉を見つめた。

「……ッ……」

無言のまま潤んだ瞳で見つめられ、可愛い妹に弱い辰吉は、観念した様子で自分から視線をそらしてしまう。「許してくれたみたい」